

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01096

研究課題名（和文）ロシア沿海地方における渤海（698～926年）遺跡出土遺物編年の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic study on the chronology of the relics excavated from the Bohai Kingdom (698-926) site in the Russian Primorye region.

研究代表者

小嶋 芳孝 (KOJIMA, Yoshitaka)

金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・客員教授

研究者番号：10410367

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ロシア沿海地方の渤海遺跡で年代の指標になる考古資料の抽出を目的としていたがコロナとロシアのウクライナ侵攻の影響で渡航が困難になり、福井県立歴史博物館、東京大学、ソウル大学博物館所蔵のロシア沿海地方と国境を接する中国吉林省延辺地方出土遺物を調査し、ロシア沿海地方の渤海遺跡と対比できる基礎資料を得ることができた。また金沢市畝田ナベタ遺跡、大津市穴太遺跡と韓国済州市竜潭洞遺跡出土の花文帯金具と渤海帯金具の比較検討を行った。さらに、平城京の井戸跡から8世紀末頃の土器と共伴した渤海系土器を調査し、渤海土器編年の定点となる資料を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロシア沿海地方のクラスキノ城跡出土軒丸瓦と中国吉林省の八連城出土軒丸瓦を比較検討し、クラスキノ城跡の軒丸瓦を8世紀後半に比定できた。また、滋賀県穴太遺跡と韓国済州市竜潭洞遺跡等出土の花文帯金具の検討を通して、ロシア沿海地方で渤海の花文帯金具が9世紀後半には出現していることを推定した。平城京の井戸から8世紀後半の土器と共に渤海土器が出土していることを確認し、渤海土器編年の定点を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to extract archaeological relics that could be used as dating for the Bohai relics in the Russian Maritime region, but the Corona and the Russian invasion of Ukraine made it difficult to visit there. So we studied relics from the Yanbian area of Jilin Province, China, which borders the Russian maritime region. We visited the Fukui Prefectural Museum of History, the University of Tokyo and the Seoul National University Museum, we could get the basic data which could be compared with the Bohai relics from the Russian Maritime region. We also carried a comparative study of the flower designed belt ornament and Bohai belt ornaments excavated from the Anou site in Otsu City, and the Yongdam-dong site in Jeju City, South Korea. Furthermore, we could study the Bohai pottery dug with the earthenware dating from the end of the 8th century from the well site in Heijo-kyo palace site, we could get a good sample for the Bohai pottery chronology.

研究分野：考古学

キーワード：渤海 クラスキノ城跡 八連城 花文帯金具 平城京

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

渤海の領域は中国東北地方、ロシア沿海地方南部、北朝鮮北部にまたがっており、各国で研究調査がおこなわれている。そのため、考古遺物の共通編年が作成されておらず、遺物の年代評価が混乱している。

2. 研究の目的

本研究では、軒丸瓦と土器などを調査して年代を特定できる資料を抽出し、編年作成の基礎資料を得ることを目的としている。

3. 研究の方法

当初はロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所（ウラジオストク市に所在）と研究交流協定を締結し、同研究所が渤海時代の遺跡から発掘した瓦や土器・金属器などの実測・写真撮影などをおこない、主に中国や日本国内の資料と比較検討を行うことによって年代判定の指標となる遺物の抽出を計画した。しかし、コロナとロシアによるウクライナ侵攻の影響でウラジオストクへの渡航が困難になり、ロシア沿海地方に隣接する中国吉林省延辺地内からの出土遺物を所蔵する国内の博物館・大学と韓国ソウル大学博物館などで資料調査を実施し、ロシア沿海地方の渤海遺跡から出土した瓦や土器・金属器と比較検討をおこなった。

4. 研究成果

各年度の成果

2020 年度：コロナウイルスによる新型肺炎が蔓延し、ウラジオストクへの飛行機便が停止された。このため、福井県立歴史博物館が所蔵する中国吉林省の八連城出土遺物の実測・胎土観察・写真撮影・3D 撮影などを実施した。八連城は中国吉林省延辺地内の琿春市に所在し、ロシア沿海地方との国境から 50 キロの地点に所在する渤海時代の平地城である。8 世紀中頃に創建され、8 世紀末には東京として一時的に渤海の王都になっていた。9 世紀中頃に機能が停止したと推定している。瓦の胎土観察した結果、8 世紀第三四半期に比定できる複弁蓮弁文瓦の胎土は砂礫が多く、8 世紀後半～9 世紀代のハート形蓮弁文瓦には砂礫が少ないという明瞭な相違のあることが判明した。この結果は、両者の瓦を生産した窯が異なっていた可能性が高いことを示している。

2021 年度：4 月 25 日と 2022 年 3 月 13 日に科研研究会を開いた。4 月 25 日の研究会では、小嶋が「斉藤優が調査した図們江流域の渤海遺跡」、中村亜希子が「西古城と八連城における出土瓦の同範関係」を報告。2022 年 3 月 13 日の研究会では、金沢大学博士課程研究生の呂夢が「唐代蓮花文瓦当の「様式・技術」の時間的変化とその背景にある生産集団の変遷」、小嶋が「古城村 1 号・2 号寺址から見たクラスキノ城跡」、中村が「清水信行・鈴木靖民編著『渤海の古城と国際交流』を読む」、中澤寛将が「装身具からみた鞣鞆・渤海の葬墓制」を報告した。

また、小嶋が Y.G. Nikitin 2001 年論文「唐・渤海と東夷」を参考に「ロシア沿海地方における渤海の領域について」を執筆し、『纏向学研究 10 号』に投稿（2022 年刊 行予定）。10 月 16 日に開催された日本考古学協会金沢大会で「古代日本海域における人の移動 - 渤海・日本航路を中心に - 」と題して基調講演をおこなった。ここでは、近年のロシアにおける渤海遺跡調査の成果をもとにロシア沿海地方における渤海の中核的領域が綏芬河流域までとする考えを述べた。このほか、V. A. ベリャエフ・S. V. シドロヴィチ「鉄利人に下賜された唐代割符」の翻訳をおこない、研究分担者・研究協力者で共有した。この論文は、ナホトカ近郊で採集された方形の金銅製割符で「鐵利蕃乞土夏」「貞元十一年」の文字が記されている。採集品であり、真贋について慎重に検討する必要はあるが、鐵利の居住域を考える上で貴重な資料である。

2022 年度：6 月 20 日に北海道大学総合博物館で礼文島香深井 1 遺跡出土の陶質土器（7 世紀代と推定）を調査し、体部下半に縦方向の磨き痕跡があることを確認でき、当該土器が大陸産の可能性を持つことを確認した。21 日に小樽市博物館で蘭島 D 遺跡出土・環状玉製品の観察をおこなった。環状玉製品は鞣鞆系装身具で、オホーツク文化の遺跡からの出土例はあるが擦文早期の出土例は本資料だけである。9 月 12 日に穴太遺跡（滋賀県大津市）出土帯金具、13 日に平城京跡出土の渤海系土器の調査をおこなった。穴太遺跡の帯金具は、透かし穴の上方中央に忍冬文を倒置して配し、左右に唐草文を置いている。同範と思われる帯金具が韓国済州島の竜潭洞遺跡から出土しており、9 世紀後半～10 世紀前半の年代が推定されている。帯金具の製作地は年代を元にとすると、渤海の可能性はある。13 日は、午前中に奈良市埋蔵文化財センターで JR 奈良駅西調査区の遺跡調査で、153 号井戸から出土した渤海土器（広口壺）を調査。この土器と共に 8 世紀後半の土器が出土しており、渤海土器の年代を特定できる基準資料と評価できる。午後は、奈良国立文化財研究所で右京八条一坊十一坪（平城第 149 次）の調査で出土した渤海土器を調査。この資料は細頸の壺型土器で、8 世紀後半～9 世紀前半の土器と一緒に出土しており、JR 奈良駅西調

査区の 153 号井戸出土土器に比べるとやや後出である。これら二点の渤海土器は、共に渤海土器の年代を考える上で重要な資料である。11 月 14 日～16 日に、東京大学の考古学研究室と総合博物館が所蔵する渤海東京（八連城）出土の石仏と瓦を調査した。石仏・瓦の写真撮影を行い、中村が石仏の 3D 撮影を実施した。3 月 2 日に石川県埋蔵文化財センターで畝田ナベタ遺跡出土花文帯金具、加茂遺跡出土帯金具の観察と中村による 3D 撮影をおこなった。また、3 日には「しいのき迎賓館セミナーーム」（金沢市）で、帯金具研究会を開催した。小嶋が「クラスキノ城跡出土の石帯製作技法について」と題して報告し、岡田有矢（大津市教育委員会）が「穴太遺跡の発掘成果と遺跡の性格」、鈴木舞（山口大学）が「遼代帯金具研究の現状」を報告、その後質疑討論をおこなった。

2023 年度：ソウル大学博物館所蔵渤海遺物調査（8 月 27～30 日）、済州島龍潭洞遺跡出土花文帯金具調査（9 月 11 日）、函館市立北方民族博物館所蔵モヨロ貝塚出土遺物調査（2 月 10 日）、オホーツクミュージアムえさし所蔵目梨泊遺跡出土資料査と北海道大学総合博物館所蔵香深井 1 遺跡出土陶質土器の再検討（3 月 21～23 日）などをおこなった。

ソウル大学博物館所蔵の中国吉林省八連城出土遺物は、1937 年に鳥山喜一・藤田亮策らが採集した遺物で、ロシア沿海地方クラスキノ城跡出土遺物と共通する瓦当や土器を確認した。済州博物館所蔵の龍潭洞遺跡花文帯金具は、大津市穴太遺跡の 9 世紀後半の溝から出土した花文帯金具と同じ文様で、ロシア沿海地方や中国北部で出土した渤海の花文帯金具の初期の様相を示す資料である。モヨロ貝塚と目梨泊遺跡出土の靺鞨系帯金具はロシア沿海地方の渤海遺跡でも出土しており、年代を検討できる資料を得た。

研究成果：本研究は、ロシアでの調査を前提にしていたがコロナとロシアのウクライナ侵攻によりロシア調査は困難になった。そのため国内や韓国に所蔵されている渤海や大陸系遺物の内、ロシア沿海地方と国境を接している中国吉林省延辺地方出土資料の調査をおこなった。福井県立歴史博物館、東京大学、ソウル大学博物館が所蔵する八連城等の出土遺物調査では、ロシア沿海地方の渤海遺物と対比できる基礎資料を得ることができた。さらに、平城京から渤海土器二点が出土している事を確認し、平城京左京五条四坊十六坪の井戸 SE513 出土から 8 世紀末～9 世紀初頭の土器と共伴した渤海系土器は、今後の渤海土器編年の定点となる資料と評価した。また、花文帯金具を石川県埋蔵文化財センターと大津市埋蔵文化財センター、済州市博物館で調査し、その成果を 2023 年 11 月 25 日に横浜ユーラシア文化館が開催したシンポジウム「東アジアの帯金具と古代日本」で「渤海の花文帯金具について」と題して小嶋が報告した。

ロシアでの現地調査は実施できなかったが、今後の調査再開に向けた基礎資料を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Murakushi M., Arai S., Laptev S., Kojima Y., Nakamura K., Oguchi M., Nikitin Y.G., Artemieva N.G., German E.I., Gorshkov M.V., Nakai I.	4. 巻 5
2. 論文標題 Chemical compositions and origin of glass beads excavated from Primorye (Vladivostok) and Amur (Khabarovsk)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 MEDIEVAL ANTIQUITIES OF PRIMORYE	6. 最初と最後の頁 517-611
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 10
2. 論文標題 ロシア沿海地方における渤海の領域について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 纏向学研究	6. 最初と最後の頁 659-665
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 25
2. 論文標題 瓦当文様の変遷から見た渤海王都の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 37-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KOJIMA Yoshitaka	4. 巻 124
2. 論文標題 An examination of the capitals of Po-hai based on research on changes in antefix motifs	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA	6. 最初と最後の頁 37-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 13
2. 論文標題 クラスキノ城跡出土石帯の再検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 同志社大学考古学シリーズ 考古学と文化史	6. 最初と最後の頁 533-542
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井 浩人	4. 巻 30
2. 論文標題 平安時代の環壕集落 (防御性集落)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青森県考古学『青森の考古学』	6. 最初と最後の頁 120-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤寛将	4. 巻 30
2. 論文標題 青森と東アジア	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青森県考古学『青森の考古学』	6. 最初と最後の頁 124-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村亜希子	4. 巻 25
2. 論文標題 書評 清水信行・鈴木靖民編『渤海の古城と国際交流』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 287-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村亜希子, 今井晃樹, 林正憲, 岩永玲	4. 巻 3
2. 論文標題 「瓦様」と瓦範 東大寺式軒丸瓦における同紋瓦・同瓦の再検討 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈文研論叢	6. 最初と最後の頁 1~37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田由紀子, 新尺雅弘, 中村亜希子	4. 巻 3
2. 論文標題 変形忍冬唐草文軒平瓦6647Cの再検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈文研論叢	6. 最初と最後の頁 133 ~ 152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小口雅史, 小嶋芳孝	4. 巻 149
2. 論文標題 ロシア沿海地方、10世紀代の平地城・山城踏査について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 弘前大学國史研究	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤寛将	4. 巻
2. 論文標題 靺鞨・渤海の住居構造と地域性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 池上悟先生古稀記念会(編)『芙蓉峰の考古学』	6. 最初と最後の頁 741-750
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井浩人	4. 巻 71
2. 論文標題 北東アジア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本考古学年報(2018年度版)	6. 最初と最後の頁 49-53
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件(うち招待講演 3件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 クラスキノ城跡出土の石帯製作技法について
3. 学会等名 渤海系帯金具研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中澤寛将
2. 発表標題 北東アジアからみた阿光坊古墳群
3. 学会等名 おいらせ町教育委員会主催「古墳館歴史講座」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 三次元計測データに基づく瓦せん(土+専)紋様の復元研究
3. 学会等名 『中日青年考古論壇』蘭州大学歴史文化学院・蘭州大学資源環境学院
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 日本人研究者らによる八連城遺跡調査と出土資料
3. 学会等名 高句麗・渤海史の射程
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 斉藤優が調査した図們江流域の渤海遺跡
3. 学会等名 小嶋科研・研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 斉藤優が調査した図們江（豆満江）下流域の渤海遺跡
3. 学会等名 「第一回 渤海考古学シンポジウム」金沢大学 古代文明・文化資源学研究センター
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井浩人
2. 発表標題 クラスキノ城跡における囲郭施設の変遷
3. 学会等名 「第一回 渤海考古学シンポジウム」金沢大学 古代文明・文化資源学研究センター
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 西古城と八連城における出土瓦の同范関係
3. 学会等名 「第一回 渤海考古学シンポジウム」金沢大学 古代文明・文化資源学研究センター
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中澤寛将
2. 発表標題 クラスキノ城跡からみた渤海の土器生産
3. 学会等名 「第一回 渤海考古学シンポジウム」金沢大学 古代文明・文化資源学研究センター
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 瓦当による渤海王都変遷の検討
3. 学会等名 唐代史研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 NAKASAWA Hiromasa
2. 発表標題 Interaction and Trade in the Ancient Northern Japan and the Okhotsk Sea Region
3. 学会等名 Interaction and Conflict in the East Sea Region: From Prehistoric Times to the Middle Ages、ソウル大学国史学科BK21事業団・韓国ユーラシア文明研究会主催、オンライン開催（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村亜希子, 今井晃樹, 林正憲, 岩永玲
2. 発表標題 三次元計測データで比較する同紋瓦と同範瓦 - 東大寺式軒丸瓦の検討 -
3. 学会等名 日本文化財科学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 古代日本海域における人の移動 - 渤海・日本航路を中心に -
3. 学会等名 日本考古学協会金沢大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井浩人
2. 発表標題 ロシア沿海地方クラスキノ城跡における日露共同調査
3. 学会等名 日本考古学協会金沢大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 渤海都城における宮殿の瓦と寺の瓦
3. 学会等名 東アジア比較都城史研究会 令和3年度第3回共同研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 渤海上京城の造営と瓦せん
3. 学会等名 第6回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 古城村1号・2号寺址から見たクラスキノ城跡
3. 学会等名 小嶋科研・研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 渤海の都城 - 建国から上京までの変遷
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 渤海仏教遺跡研究の現状と課題
3. 学会等名 東アジア比較都城史研究会 第1回共同研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中澤寛将
2. 発表標題 考古学からみた渤海とその周辺
3. 学会等名 二国間交流セミナー「高句麗・渤海史に関する日中研究者会議」予備報告会 / 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 渤海上京城遺跡における寺院と禁苑
3. 学会等名 東アジア比較都城史研究会 第1回共同研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 渤海上京城遺跡における寺院と禁苑
3. 学会等名 東アジア比較都城史研究会 第1回共同研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 渤海瓦せん研究の諸問題 なぜ、考古学者は瓦を研究するのか
3. 学会等名 二国間交流セミナー「高句麗・渤海史に関する日中研究者会議」予備報告会 / 第5回金毓黻と東北アジア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村亜希子
2. 発表標題 フォトグラメトリーによる三次元計測データの比較
3. 学会等名 日本文化財科学会第37回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計16件

1. 著者名 小林謙一編（中澤寛将ほか12名）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 314
3. 書名 考古資料と歴史史料（担当：分担執筆，鞆鞆・渤海の葬墓制 土坑墓から石室墓へ の変容過程	

1. 著者名 小嶋芳孝・高橋浩二ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 石川県立歴史博物館	5. 総ページ数 118
3. 書名 令和五年度春期特別展『碧の回廊 - 古代の日本海交流 - 』（小嶋担当：渤海の歴史と使節の派遣）	

1. 著者名 網伸也編（小嶋ほか21名）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学出版会	5. 総ページ数 457
3. 書名 『東アジア都城と宗教空間』（小嶋担当：「仏教寺院の分布から見た渤海社会」）	

1. 著者名 熊木俊朗・福田正宏編（中村亜希子ほか）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 216
3. 書名 ：『オホーツクの古代文化 東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』（中村担当：コラム「駒井和愛と渤海国の考古学研究」）	

1. 著者名 小嶋 芳孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 370
3. 書名 古代環日本海地域の交流史	

1. 著者名 稲垣森太・大賀克彦・田村朋美・菊地芳郎・小嶋芳孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 奥尻町教育委員会	5. 総ページ数 114
3. 書名 青苗遺跡重要資料総括報告書	

1. 著者名 岩井浩人（編著）・菅頭明日香・眞鍋早紀ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青山学院大学史学科	5. 総ページ数 100
3. 書名 青山学院大学総合研究所 研究成果報告論集『渤海「日本道」に関する海港遺跡の考古学的研究 - クラスキノ城跡の発掘調査を中心に - 』	

1. 著者名 鈴木靖民、金子修一、浜田久美子、赤羽目匡由、澤本光弘、宋基豪、清水信行、田村晃一、小嶋芳孝、 A.L.イブリエフ、V.I.ポルデイン、酒寄雅志、中澤寛将、E.I.ゲルマン	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 466
3. 書名 渤海の古城と国際交流	

1. 著者名 大貫静夫編 (担当:分担執筆, 範囲:渤海国の瓦せんの変遷と系譜 紋様せんを読み解く)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 316
3. 書名 中国考古学論叢 : 古代東アジア社会への多角的アプローチ	

1. 著者名 国立文化財機構奈良文化財研究所(原著:河南省文物考古研究院) (担当:共訳, 範囲:第5章、付論1・4)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 622
3. 書名 鞏義黄冶窯発掘調査報告	

1. 著者名 古畑徹編(担当:分担執筆, 範囲:渤海瓦せん研究の諸問題 なぜ、考古学者は瓦を研究するのか) 3.出版 社:汲古書院	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 238
3. 書名 高句麗・渤海史の射程 : 古代東北アジア史研究の新動向	

1. 著者名 古畑徹（編）（分担執筆：中澤寛将「考古学からみた渤海とその周辺」）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 238
3. 書名 高句麗・渤海史の射程：古代東北アジア史研究の新動向	

1. 著者名 小嶋芳孝、仁藤敦史、重見泰、李陽浩、吉永眞彦、小澤毅、他10名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 502
3. 書名 講座畿内の古代学第 巻 王宮と王都	

1. 著者名 小嶋芳孝、中澤寛将、鈴木靖民、田村晃一、清水信行、金子修一、浜田久美子、酒寄雅志、ほか8名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版社	5. 総ページ数 466
3. 書名 渤海の古城と国際交流	

1. 著者名 中村亜希子、大貫静夫、鈴木舞、他7名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 320
3. 書名 中国考古学論叢 - 古代東アジア社会への多角的アプローチ	

1. 著者名 中澤寛将、鈴木靖民、田村晃一、清水信行、金子修一、浜田久美子、酒寄雅志、小嶋芳孝、ほか8名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版社	5. 総ページ数 466
3. 書名 渤海の古城と国際交流	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩井 浩人 (Hirotō IWAI) (10582413)	青山学院大学・文学部・准教授 (32601)	
研究分担者	中村 亜希子 (Akiko NAKAMURA) (60600799)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・客員研究員 (84604)	削除：2022年3月28日

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中村亜希子 (Akiko NAKAMURA)		2022年4月から

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関